

「うるわしのヴァシリーサ」をめぐって

鈴木 晶

ちょうど1年前、ということは1992年の春、アメリカの友人が送ってくれた本の包みをわくわくしながら開いていたら、私の大好きなイラストレーター、イヴァン・ビリービンの絵が目飛び込んできた。「うるわしのヴァシリーサ」の挿絵である。バーバヤガーの住処から出てきて家路につくヴァシリーサを描いたものだ。棒の先に突き刺された、両の目玉が燃えているされこうべ（これが後に継母とその連れ子たちを焼き殺すことになる）を松明のように掲げている。後方には「小屋をかこんでいる柵は人間の骨でできていて、一本一本の棒杭の上に両目をつけたされこうべがささっていた」(1)と形容されている、バーバヤガーの住処が見える。

このビリービンの絵を表紙画としていたのは、なんと『呪縛』(2)、そして『グリム童話の過酷な事実』(3)に続く、マリア・タタールの第三作『首をはねろ!』(4)だったので吃驚した。じつはこの本が届く半年くらい前に、親しくしている出版社にタトル・エイジェンシーからゲラ刷が送られてきて、そこの編集者が検討してくれということで、すぐに翻訳権を取得するよう返事をしたのだったが、なんせゲラ刷だから表紙画などなかった。そのときは半分くらいまでしか読まなかったので気づかなかったが、表紙画にするくらいだから、当然「うるわしのヴァシリーサ」を論じているんだろうと思ってばらばら読んでいったら、たしかに後半で「うるわしのヴァシリーサ」を論じていた。

それからしばらくして、今度はイングリッシュ・エイジェンシーから分厚い本が送られてきた。『狼といっしょに走る女たち』(5)というタイトルだ。アメリカで売れに売れているから検討してくれということで、一通り目を通したら、この本の著者、ユンギアンにしてフェミニスト、かつエコロジストであるクラリッサ・ピンコーラ・エステスも、ある章で「うるわしのヴァシリーサ」について論じている（結局この本は厚すぎるので断ることにした）。

こうしたことがとくに目にとまったのは、そのしばらく前から、いわゆる継子話のことが気になって、世界中のシンデレラ物語を345篇以上集めた、かの有名なコックスの『シンデレラ』(6)を少しずつ読んでいたからである。山室静はこのコックスの本について、「東大図書館の蔵書目録にはのっていたが、実物は失われたらしい」(7)と書いているが、生来無精な私は、古い本だからどうせ国内にはないだろうと勝手に

決め込んで、ニューヨークにいる友人に頼んでゼロックス・コピーを送ってもらったのだった。にもかかわらず、私の気まぐれな好事家的研究は現在にいたるまでまったくなんの成果も上げていないのだが、「うるわしのヴァシリーサ」のどこが興味深いかについて若干述べてみたい。

「うるわしのヴァシリーサ」は、ヴァシリーサが8歳のときに母親が亡くなり、父親が再婚するところから、物語が始まる。継母とはいったい何か。前にも拙著の中で述べたことだが(9)、かつては継母という言葉も用いられたのだろうが、少なくとも現在では現実の「継母」にたいして継母という言葉が使われることはまずない。にもかかわらず、われわれの誰もが継母という言葉を知っているという事実はどうも気にかかる。われわれが継母という言葉に出会うのはもっぱら民話の中なのである。実際、民話には夥しい数の継母が登場する。歴史学者はそれを歴史的事実の反映と解釈する。たしかに、死亡率が高かったせいで結婚生活が離婚よりも死別によって中断されることのほうが多く、「継母がいたるところに発生する結果となった」(10)ことは事実である。しかし、歴史学者の解釈がおそらくハズレであることは、「白雪姫」や「ヘンゼルとグレーテル」などにおいてヴィルヘルム・グリムが原話の実母を継母に書き換えたことや、わが国でもっとも古い継子いじめの話である『落窪物語』が成立した時代に継子いじめが広く存在していたとは考えられないことなどから、明らかである。私としては、継母が母親の一樣相、とくにその否定的側面の表われであるとする心理学者の解釈がやはりもっとも的を得ているのではないかと思う。だいたいちょっと考えてみれば、継母がいたるところにいたならば、継母が悪役を演じる話がこれほどたくさん流布していたはずがあろうか。継母にいじめられた子どもがひそかに語り継いだ物語ばかりが残ったとも考えられない。

このような解釈は、「ヴァシリーサ」のような民話を少女の成長物語と見なす解釈と表裏一体をなしている。継母から押しつけられるさまざまな苦役は、まさしくチャイルド・アビューズであるが、それは同時に、バーバヤガーから課せられる無理難題と並んで、成長のための課題と解釈することもできる。この話が少女の成長物語であることはまた、少女が成人して結婚することが結末となっていることから明らかであろう。

さらに、心理学的解釈の視点に立てば、バーバヤガーは、「ヘンゼルとグレーテル」における森の魔女、「赤ずきん」のおばあさんなどと同じく、母親が姿を変えたものである。実際、この話におけるバーバヤガーは「悪」あるいは「魔」を象徴する存在というよりは、むしろ試練をあたえてヴァシリーサを成長させようとする教育者であり、継母とその連れ子たちを罰するのを助ける助力者である。

こうした視点に立てば、「ヴァシリーサ」をはじめ多くの民話にみられる、実母が死んで継母が家に入ってくるという話のパターンがいかなる意味をもっているのかは

明らかである。子どもに惜しみなく愛情を注ぐ優しい母親は、子どもが成長するにしたがって、先に名を挙げたエステスの言葉を借りれば、良い母親 (good mother) から良すぎる母親 (too-good mother) に変貌してしまい、子どもをいつまでも赤ん坊のままに留めておこうとして、その成長を阻害するものとなる。そうした良すぎる母親と訣別しなければ、子どもはその先成長を続けることができないのだ。

しかしながら、子どもは母親と訣別して独力で成長していくことはできない。当然ながら、母親からなんらかのものを受け継ぐのである。ヴァシリーサが母親から譲られる人形が、それを象徴している。その意味からは、この話は世代から世代へと女が継承してゆくものをめぐる物語でもある。エステスは、この人形が象徴しているのは「(野性的)直観 (intuition)」であるという。少女が継承し、少女を助けることになるものは、かならずしも直接的に母親から遺贈されとはかぎらない。9世紀唐の『酉陽雜俎』続集に収められている「葉限」は、南方熊楠によって発見され、世界最古のシンデレラ物語といわれているが、そこでは娘が川でとった魚が娘を助けることになる。このように、母親の「遺産」が何かに「のりうつった」と解釈しうるパターンも広く見られる。ヴァシリーサが母親から遺贈された人形が、母親から受け継いだ「知恵」であることは、「(人形は)ヴァシリーサを慰めたり、知恵をさずけたりした」とか、「人形はヴァシリーサに、日焼けどめの薬草まで教えてくれた」(11)という一節からも明らかだろう。ただし、人形には食べ物をあたえなければならないことになっている。これは心理学的には、みずからの心のその部分にエネルギーを充当すること、と解釈できるだろう。

まったく別の面からの心理学的解釈も可能であろう。先に名を挙げたタートルは、「ヴァシリーサ」がイギリスの民話「ジャックと豆の木」ときれいな対称をなしていることに注目している。ジャック・母親・人食い巨人の三者が、ヴァシリーサ・父親・継母(バーバヤガー)の三者と、対称関係にあるというのである。タートルが注目しているのは、両方の話に見られるエディプスの欲望、すなわち異性の親にたいする近親相姦欲望である。「ジャックと豆の木」が、ジャックが、自分をとって食おうとする父親を亡き者にして母親と結ばれる物語であるとすれば、「ヴァシリーサ」は、ヴァシリーサが継母を亡き者にして父親と結ばれる物語である。このことがより明確に表されているのは、「うるわしのヴァシーサ」(104)の類話である「バーバヤガー」(103)である。母親がひとり娘を残して死に、父親は再婚する。継母は娘を自分の姉(バーバヤガー)のもとへと送り出し、バーバヤガーに食わせてしまおうとするが、自分の「本当のおば」(ヴァシリーサにとっての人形に相当するもの)に助けられて家に帰る。父親は娘の話聞いて後妻を鉄砲で撃ち殺してしまい、「それからは娘と二人で何不自由なく暮らした」(12)。

ヴァシリーサの場合は、父親と二人で暮らすことにはならず、彼女は王様と結婚す

る。だが、結末部分には次のように書かれている。「その場で王さまはヴァシリーサの白い手をとって自分の隣にすわらせ、すぐに婚礼があげられた。まもなくヴァシリーサの父親も旅から帰ってきて、娘の身に起こったことを聞いてたいそう喜び、いっしょに暮らすことになった」(13)。この結末部分を解釈するのに有効なのが、マグラザリーの昔話分析(14)である。グリム童話集には、「兄さんと妹」(KHM11)、「12人の兄弟」(KHM9)、「7羽のカラス」(KHM25)、「6羽の白鳥」(KHM49)など、兄妹が主人公で、兄が動物に変身するという話はいくつもある。マグラザリーによると、これは近親相姦を回避するためである。ヘンゼルとグレーテルのように、兄妹が幼い場合には近親相姦の危険がないが、思春期になると、兄妹間の愛情は危険なものになりうる。それで兄は動物に姿を変えるのである。しかも、「金の鳥」(KHM57)のように、兄が仲人役になって、妹の伴侶を見つけるという話もある。「兄さんと妹」でも、鹿になった兄が王様に見つかったことが、妹が王様と結婚するきっかけとなる。これらの話では、最後に妹が結婚することになるのだが、その結婚が究極のテーマではない。妹が結婚することによって、兄と妹とがその後もずっといっしょに暮らすことができるということが重要なのである。それが証拠に「兄さんと妹」の結びは、「こうして、小さい妹と兄さんは、死ぬまでいっしょに幸福に暮らしました」となっている。これを「ヴァシリーサ」にあてはめてみると、ヴァシリーサが王様と結婚することによって、父親は近親相姦の危険を回避し、より安全な形で娘と暮らしてゆることができる、ということになる。

と、まあ、私の場合は、心理学と昔話を玩具にして遊んでいるばかりで、まともな研究はいっこうにすすまないののである。

註

- (1) アファナーシェフ『ロシア民話集』中村喜和編訳、岩波文庫、上、86頁。
- (2) Maria Tatar, Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature, Princeton U.P., 1978. (邦訳は国書刊行会より刊行予定。邦題は『魔の眼に魅せられて』となる予定)
- (3) Maria Tatar, The Hard Facts of the Grimms' Fairy Tales, Princeton U.P., 1987. (マリア・タター『グリム童話／その隠されたメッセージ』鈴木晶他訳、新曜社)
- (4) Maria Tatar, Off With Their Heads!: Fairy Tales and the Culture of Childhood, Princeton U.P., 1992. (邦訳は新曜社より刊行予定)
- (5) Clarissa Pinkola Estés, Women Who Run with the Wolves: Myths and Stories of the Wild Woman Archetype, Ballantine Books, 1992.
- (6) Marian Roalfe Cox, Cinderella: Three Hundred and Forty-five Variants of

Cinderella, Catskin, and Cap o' Rushes. Ed. Andrew Lang, London: David Nutt, 1893.

- (7) 山室静『世界のシンデレラ物語』新潮選書、57頁。
- (8) アファナーシェフ、前掲書、356頁。
- (9) 鈴木晶『グリム童話／メルヘンの深層』講談社現代新書、77頁。
- (10) たとえば、ロバート・ダーントン「農民は民話をとおして告げ口する——マザーグースの意味」、『猫の大虐殺』海保真夫・鷺見洋一訳、岩波書店、33頁。
- (11) アファナーシェフ、前掲書、83頁。
- (12) 同上、80頁。
- (13) 同上、97頁。
- (14) James M. McGlathery, *Fairy Tale Romance: The Grimms, Basile, and Perrault*, U. of Illinois P., 1991. (邦訳は新曜社より刊行予定)